

## 肉親の情愛をうたった歌

群馬県立女子大学名誉教授 北川 和 秀

### 【親子】

(父の思い)

子等を思ふ歌一首 序を并せたり

釈迦如来い、金口に正に説きたまはく、等しく衆生を思ふこと、羅睺の如しとのたまへり。又説きたまはく、愛は子に過ぎたりといふこと無しとのたまへり。至極の大聖すら尚し子を愛しふる心あり。況むや世間の蒼生の、誰かは子を愛しびずあらめや。

① 瓜食めば 子ども思ほゆ 粟食めば まして偲はゆ 何処より 来りしものそ 眼交にもとな懸りて 安眠し寝さぬ (五・八〇二)

### 反歌

② 銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも (八〇三)

老いたる身の重き病に年を経て辛苦み、及児等を思ふ歌七首 長一首短六首

(そのうちの反歌二首)

③ 術も無く苦しくあれば出で走り去ななと思へど児らに障りぬ (五・八九九)

④ 富人の家の児どもの着る身無み腐し棄つらむ絁綿らはも (九〇〇)  
天平五年六月丙申の朔にして三日戊戌の日に作る

男子名は古日に恋ふる歌三首 長一首短二首 (そのうちの反歌)

⑤ 若ければ道行き知らじ幣は為む黄泉の使負ひて通らせ (五・九〇五)

⑥ 布施置きてわれは乞ひ袴むあざむかず直に率去きて天路知らしめ (九〇六)  
右の一首は、作者詳らかならず。但し、裁歌の体、山上の操に似たるを以ちて、この次に載す。

⑦ 唐衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして (二一〇・四四〇二)

信濃防人

⑧ 家にして恋ひつつあらずは汝が佩ける大刀になりても齋ひてしかも (二一〇・四三四七)

上総防人の父

(母の思い)

天平五年癸酉、遣唐使の船、難波を發ちて海に入る時に、親母の、子に贈る歌一首  
短歌を并せたり

①秋萩を 妻問ふ鹿こそ 独子に 子持てりといへ 鹿児じもの わが独子の 草枕  
旅にし行けば 竹珠を しじに貫き垂り 齋瓮に木綿取り垂でて 齋ひつつ わが思  
ふ吾子 真幸くありこそ (九・一七九〇)

反歌

②旅人の宿りせむ野に霜降らばわが子羽ぐくめ天の鶴群 (一七九一)

大伴坂上郎女、竹田庄より女子の大嬢に贈る歌二首 (そのうちの一首)

③うち渡す竹田の原に鳴く鶴の間無く時無しわが恋ふらくは (四・七六〇)

(父への思い)

市原王の、宴に父の安貴王を捧く歌一首

①春草は後はうつろふ巖なす常磐に坐せ貴きわが君 (六・九八八)

②橘の美袁利の里に父を置きて道の長道は行きかてぬかも (二〇・四三四一) 駿河防人

(母への思い)

①時々の花は咲けども何すれそ母とふ花の咲き出来ずけむ (四三二三) 遠江防人

②真木柱讃めて造れる殿の如いませ母刀自面変りせず (四三四二) 駿河防人

③わが母の袖持ち撫でてわが故に泣きし心を忘らえぬかも (四三五六) 上総防人

④旅と云ど真旅になりぬ家の母が着せし衣に垢つきにかり (四三八八) 下総防人

⑤天地のいづれの神を祈らばか愛し母にまた言問はむ (四三九二) 下総防人

(両親への思い)

敬みて熊凝の為に其の志を述ぶる歌に和ふる六首 序を并せたり

筑前国守山上憶良

大伴君熊凝は、肥後国益城郡の人なり。年十八歳にして、天平三年六月十七日に、相  
撲使某国司官位姓名の従人と為り、京都に参向ふ。为天に幸あらず、路に在りて  
疾を獲、即ち安藝国佐伯郡の高庭の駅家にて身故りぬ。臨終らむとする時に、長嘆息  
きて曰ひしく、……我が老いたる親並に庵室に在す。我を待ちて日を過ぎば、おのづ  
からに心を傷むる恨あらむ。我を望みて時に違はば、必ず明を喪ふ泣を致さむ。哀  
しきかも我が父、痛しきかも我が母。一身死に向ふ途を患へず、唯し二親生に在す  
苦を悲しぶ。今日 長に別れなば、いづれの世にか観ゆること得むといひき。乃ち

歌六首を作りて死みまかりぬ。其の歌に曰はく（そのうちの反歌三首）

① 家に在りて母がとり見ば慰むる心はあらまし死なば死ぬとも（五・八八九）

② 出でて行きし日を数へつつ今日今日と吾あを待たすらむ父母らはも（八九〇）

③ 一世には二遍見ふたたびえぬ父母を置きてや長く吾あが別れなむ（八九一）

④ 父母も花にもがもや草枕旅は行くとも捧たかごて行かむ（四三二五）遠江防人

⑤ 水鳥の発たちの急いそきに父母に物言はず来けにて今ぞ悔しき（四三三七）駿河防人

⑥ 忘らむて野行き山行き我来れど我が父母は忘れせぬかも（四三四四）駿河防人

⑦ 父母が頭かしらかき撫なで幸さくあれていひし言けと葉はぜ忘れかねつる（四三四六）駿河防人

⑧ ちはやぶる神の御坂みさかに幣ぬさまつ奉たり齋いはふ命いのちは母父おもちちちが為ため（四四〇二）信濃防人

### 【兄弟姉妹】

（兄弟）

十一年己卯夏六月、大伴宿祢家持、亡みまかりし妾をみなめを悲傷かなしびて作る歌一首

① 今よりは秋風寒く吹きなむをいかにか独り長き夜を宿ねむ（三・四六二）

弟大伴宿祢書持、即ち和したふる歌一首

② 長き夜よを独りや寝むと君が言へば過ぎにし人の思ほゆらくに（四六三）

霍公鳥を詠む歌二首

③ 橘たちばなは常花じょうはなにもが霍公鳥住むと来鳴きなかば聞かぬ日無けむ（一七・三九〇九）

④ 珠たまに貫ぬく棟あふちを家に植うえたらば山霍公鳥離かれず来こむかも（三九一〇）

右は、四月二日に、大伴宿祢書持、奈良の宅より兄家持に贈れり。

長逝せる弟を哀傷あなしぶる歌一首 短歌を并あはせたり

⑤ 天離あまざかる 鄙治ひなをさめにと 大君おほきみの 任まけのまにまに 出でて来こし われを送ると あをによし

奈良山過ぎて 泉川 清き川原に 馬とどめ 別れし時に 真幸まさきくて 吾われ帰かへり来こむ

平たひらけく 齋いはひて待てと 語らひて 来こし日の極きはみ 玉梓たまほこの 道みちをた遠とほみ 山川せがの 隔へな

りてあれば 恋しけく 日長きものを 見まく欲ほり 思おもふ間あひだに 玉梓たまづさの 使つかの来ければ

嬉うれしみと 吾あが待ち問ふに 逆言およづれの 狂言たはごととかも 愛はしきよし 吾な弟おとの命みこと 何なにしか

も 時ときしはあらむを はだ薄すすき 穂ほに出いづ 萩の花 にはほへる屋戸やどを 言いふこころは、

この人、人となり花草花樹を愛でて多く寝院の庭に植う。かれに花薫へる庭と謂へり 朝庭に 出で立ち平

し 夕庭に 踏たひらみ平たひらげず 佐保のうちの 里さとを行き過ぎ あしひきの 山やまの木末こみに

白雲しらぐもに 立ち棚引くと 吾われに告つげつる 佐保山に火葬せり。かれに佐保の内の里さとを行き過ぎといへり

- ⑥ 真幸まさきくと言ひてしものを白雲しらくもに立ち棚引くと聞けば悲しも（三九五八）  
⑦ かからむとかねて知りせば越こしの海うみの荒磯あらいその波なみも見せましものを（三九五九）

右は、九月二十五日に、越中守大伴宿祢家持、遙かに弟の喪を聞き、感傷かななしびて作れり。

（姉妹）

大伴の田村家たむらのいへの大嬢おほいらつめ、妹坂さかのうへのおほいらつめ上大嬢おほいらつめに贈る歌四首（そのうちの二首）

- ① 遠くあらばわびてもあらむを里近く在りと聞きつつ見ぬが術すべなき（四・七五七）

- ② 白雲しらくものたなびく山の高高たかだかにわが思おもふ妹を見むよしもがも（七五八）

右、田村大嬢おほいらつめと坂上大嬢おほいらつめと、并ならびに右大伴宿祢麻呂卿むすめの女むすめそ。卿、田村の里すに居すむ。号なを

田村大嬢と曰ふ。但し、妹坂上大嬢は、母、坂上の里すに居すむ、仍よりて坂上大嬢と曰ふ。時に姉妹とむら諮問

ひに、歌を以ちて贈答す。

（姉弟）

大津皇子おほつみ、竊ひそかに伊勢の神宮かみみやに下りて上り来ましし時の大伯皇女の御作歌みうた二首

- ① わが背子を大和へ遣やるとさ夜深ふけて 暁露あかときつゆにわが立ち濡ぬれし（二・一〇五）

- ② 二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君が独り越ゆらむ（一〇六）

大津皇子おほつみ薨かひあがりましし後、大来皇女伊勢の齋いつきのみや宮みやより京みやこに上る時の御作歌みうた二首

- ③ 神風かみかぜの伊勢の国にもあらましをなにしか来けむ君もあらなくに（二・一六三）

- ④ 見ほまく欲ほりわがする君もあらなくになにしか来けむ馬疲うまるるに（一六四）

大津皇子の屍かばねを葛城かつらぎの二上山ふたかみやまに移し葬はぶる時、大来皇女の哀あはしび傷きずむ御作歌みうた二首

- ⑤ うつそみの人にあるわれや明日よりは二上山を弟世いもせとわが見む（二・一六五）

- ⑥ 磯いそのうへおに生おふる馬酔木あしびを手折たをらめど見すべき君がありと言はなくに（一六六）

右一首、今案かむがふるに、移し葬る歌に似ず。けだし疑はくは、伊勢の神宮かみみやより京みやこに還る時、路ちみちのへに花はなを見て感傷かなな哀咽あひなしてこの歌を作るか。